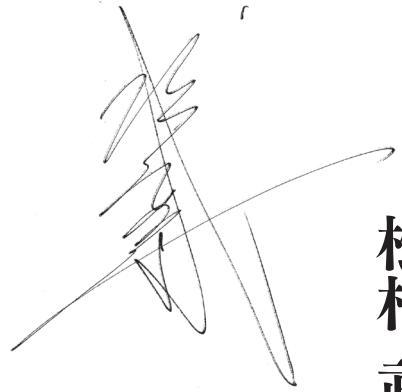


# あれ

## 巻頭言



松村 武

MATSUMURA, Takeshi

小学校への通学路の途中に神社があり、下校時にはいつもそこでひとしきり遊んでから帰った。その神社は、あの『古事記』の中身を暗誦したと伝わる稗田阿礼を祀っている。実在したのかどうか、個人の名前であるかどうかもさだかではない、ともすると、それこれの「あれ」ではないとも言われる、この稗田阿礼は、奈良県大和郡山では知恵と記憶の神様とされ、受験シーズンには子供達が列をなし、毎年、全国記憶力選手権も開かれる。この稗田阿礼が暗誦して太安万侶が文字にして書き下ろしたものが『古事記』。そんな土地に生まれたご縁で『古事記』に関する地元の演劇に携わって以降、僕の作風は一気に古代史寄りに傾いて今に至る。

暗誦というと、一人の人が目を閉じて座り、暗記した言葉を延々と唱える景が浮かぶかもしれない。しかし『古事記』は紆余曲折の甚だしい物語である。登場人物も多い。ミッシヨンとしては、文字にして書き下ろしている相手にちゃんと内容が伝わらないといけない。これはお経を唱えるようにはいかないはずである。身振り手振りは絶対に必要だろう。呼吸を操り、空気感を

伝える巧みな語り口調も必須である。しかも『古事記』には歌が非常に多い。歌うことも必要だった。これはもはや一人芝居、しかもミュージカル、いや待てよ。本当に一人で座っているだけなのか。そんな落語みたいにする必然性はない。もしかすると何人かいたのではないか。稗田阿礼というのはもはや、集団の呼称の可能性もある。まるで劇団みたいな。

文字流通がない時代、距離を越えて情報を交わすツールは人だった。中世における忍者の原像である。各地に散った諜報員が、出来事を記憶して持ち帰り中央に伝える。そういう職務が王朝内に存在したはずである。そこではきつと記憶力と共に、伝える力が問われたに違いない。リアルに起こっていることを実感として伝える表現力の技法の中に、誇張や抽象的な飛躍、歌や踊りも含めた多彩なやり口が必要だったろう。限りなく演劇作品と言える、その成果の一つが、暗誦された現場における『古事記』であり、それを文字として書き下ろした「戯曲」が今に残るというわけだ。